編集後記：私事ですが，気象研究所から気象庁観測部に異動して，まる3年が経過しました．我が観測部の大きな仕事の一つとして，観測を行い，品質管理をした上で，データを公開するということがあるのですが，このような部署の性格上，データセットに関わる話にいろいろ触れることになります．

先日も職務に関連して，「オープンデータ」なる概念をはじめて知ったのですが，公的機関が保有する情報を積極的に一般に公開し，有効に活用しようという動きがあるようです．この点，当庁なぞはオープンデータを日常的に量産していると思うのですが，どうでしょうか．また，本屋に出向くと，「ビッグデータ」なる言葉を冠した本・雑誌が大流行しているのがわかります．巨大なデータセットを指す単語のようですが，コンピュータとネットワーク，センサーの普及・発展により，以前は収集したり，取り扱うのが困難だった要素・容量のものでも解析・利用ができるようになってきたということで，ここを商機と睨んだ方が多いように見受けました．巨大データを解析して，予測まで行うといえば，気象学の専売特許だと思っていましたが，どうやら今ではそうではないようです．

とはいえ，次回の気象学会春季大会で「気象庁データを利用した気象研究の現状と展望」や「気候研究のための気象観測データベースの発展」と題した専門分科会が実施されるのは，上記の動向とも無縁ではないと存じます．また，日本地球惑星科学連合の次回の連合大会では，「地球環境関連データセット展覧会」や「情報地球惑星科学と大量データ処理」といったセッションが持たれるようです．これらはまさに上述のオープンデータ・ビッグデータに関連した研究集会と思われます．今後はそれらの成果が学術誌等でも発表されることでしょうから，今から楽しみです．

天気では，その昔，日本におけるインターネット利用の「黎明期」にあたる1995年に，「気象学におけるインターネット」と題した解説をのべ4ヶ月にわたって連載したことがありました．小職も校正担当の編集委員として，林先生の電脳倶楽部の原稿に赤を入れさせていただいた憶えがあります．あの頃の，ネットをめぐる熱気はすごかったですね．今回のオープンデータやビッグデータといった用語が「バズワード（IT業界の流行語）」に留まるのかどうか見極めも必要でしょうが，「インターネット」に倣って，天気の解説で特集してみるのも面白いかもしれません．

（別所康太郎）